

『君の詩も讀んだが一つ歓迎會をしようか』

酒井工場へ行つた。靜ちやんが徳利に地酒を買ひにやる。

僕は情けない氣もした。

自分の心に觸れる何物もない。

獨眼龍の醫者の所へ行つて、金を貸せと言つても貸さない。

ハルコヲツレテスク コイ

辻潤に電報を打つて呉れるように芝に頼んだ。

町で遇ふ若い女も男も大概知つてゐる。

二三人と二三人藝者を呼んで、紅葉館で酒をのんだ。

二三日経つた。

僕は湯に入つても、オンアボギヤを言ふ様になつた。

何かしら大聲で終號しながら歩いた。

刑事が何うかしなければ不可ないと、新聞記者が話す。